
仮面ライダーディケイド Depression of God

聖依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド Depression of God

【Nコード】

N3726Y

【作者名】

聖依

【あらすじ】

ライダー大戦からしばらく経った頃、光写真館には仮面ライダーディケイドこと門矢 士とその店主光 栄次郎がいた。ライダー大戦からユウスケ（仮面ライダークウガ）はもとの世界へ、光 夏海（仮面ライダーキバラー）とキバラーは旅へと出ていた。

いつものように栄次郎と共に写真館にて1日を過ごしていると、士のもとに差出人不明の荷物が届き、中を開けてみると中には士の手持っているカードと同じ物であったが、絵は以前みたいに消滅していた。

カードが届いたと同時に地面が大きく揺れ、土は外へ出てみると、外には土が見たことがない巨人の怪物がビルなどをなぎ払っていた。土はディケイドに変身し、その巨人に立ち向かっていたが、突如、幾多の赤い光の玉が現われ、巨人たちに攻撃をし始めた。そして、土もその光の玉に写真館の前まで連れて行かれ、その光の中から古泉と名乗る少年が現われる。古泉はカードの送り主が自分であるのと、土に世界を救って欲しいと懇願する。土は詳しい話を聞きたかったが、土のいる世界が話す時間を与えてはくれず、古泉は光となって消えていった。

光写真館に戻ると土を心配する栄次郎を他所に土は古泉が送ったカードを箱から取り出す。土は旅を再開する決意をし、スクリーンに触れると別のスクリーンが下り、絵が浮かんできたスクリーンには学園都市を背景に上条当麻、インデックス、御坂美琴の3人の絵が浮かび上がる。

序章

光写真館。

この写真館に新聞を読みながら優雅にコーヒーを飲んでいる一人の青年がいる。

彼の名は門矢 士。またの名を仮面ライダーディケイド。九つの世界を旅し、大ショッカーとの激闘から二年が経った。今ではしないカメラマンとしてここに居座っているが、未だに彼の写真はばやけたり歪んだりした物ばかりでまともに撮れた写真は一枚もない。「相変わらず。政治と金の問題ばかりだな。爺さん。コーヒーのお代わりだ」

新聞を読みながら光写真館の店主である光栄次郎にカップを差し出す。

「はいはい。それにしても土くんはよかったのかい？」

「なにがだ？」

「ユウスケくんは元の世界に戻ったのに、土くんは戻らなくてよかったのかい？」

「なあに、俺ならいつでも戻れるさ。それに爺さん一人にしちやこの写真館はやっていけないだろ」

かつてこの写真館には二人のほかには仮面ライダークウガこと小野寺ユウスケと栄次郎の孫の光 夏海がいたのだが、ユウスケは先ほど言った通り、自分のいた世界へと戻り、夏海は自分の歩むべき道を決めるため、キバールと共に他の世界へと旅に出ていて、そして今に至ったわけだ。

「土くんに心配されるほど俺は老いばれてないよ。それより土くん。君に荷物が届いているよ」

「俺に荷物？」

栄次郎から小さな箱が渡された。

荷物の差出人は不明。この世界で士を知る人物は栄次郎と旅に出

ている夏海以外まったく知らないはず。

では、この荷物は土を知っている世界から来たものなのだろうか。

土は箱を開けてみると、中から土の持っているカードと同じ物が入っていた。

「これは……」

ライドブッカーからカードを取り出すと、全く瓜二つであったが、決定的な違いとして、荷物に入っていたほうのカードには土が旅を始めたときと同様、絵が消滅していた。

「もしかして海東のか？」

海東大樹。またの名を仮面ライダーディエンド。土の親友にて、お宝を盗む泥棒である。彼は現在、お宝探しを続行し、世界を旅している。

「あいつの性格からしてそれはないな」

いったい誰からであろう。と、考えていたら。突然、地面が大きく揺れだした。最初は地震かと思った。しかし、地面の揺れ方が明らかにおかしいと思った土はすかさず外へ出てみると、土は思わず目を大きく見開いてしまう光景であった。

半透明の巨人たちがあらゆる建物を破壊していた。

「魔化魍？ いや、違う」

今まで旅した世界にこんな巨人は見たことがなかった。

「どちらにしろ。倒すだけだ」

土はディケイドドライバーを付け、ライドブッカーからディケイドのカードを取り出す。

「変身！」

【KAMENRIDE DECADE】

ディケイドのカードをディケイドドライバーに入れ、土は仮面ライダーディケイドに変身する。

バイクに乗り、巨人の近くまで走っていく。

「さあて、このカードで一気に決めさせて貰うぜ」

【KAMENRIDE HIBIKI】

ディケイドのバイク、マシンディケイダーに乗りながらディケイドドライバーに響鬼のカードを入れ、響鬼に変身し、さらにカードを入れる。

【ATTACKRIDE ONGEKIBOU REKKA】

響鬼の技【音棒術・烈火弾】を発動させ、烈火弾を巨人に当てるが、あまり効果がないようであった。

「余り効いてないな。それなら」

巨人の頭上まで跳ぶと同時にカードを入れる。

【FINALATTACKRIDE HIIHIIHIBIKI】

手元に音撃鼓が現れる。

「火炎連打の型！」

巨人の頭上に音撃鼓を貼り付け、ディケイド響鬼はそこを音撃棒で激しく振り落としていき、響鬼の必殺技を炸裂させる。

巨人は粉々に跡形もなく消え去り、ディケイドへと戻る。

「あれはいつたい……」

この世界でいつたい何が起きたのかと思っていると、あの巨人が今度は三体も現われる。

「くそ！ またか。それならこのカードだ」

デッキから仮面ライダーJのライダーカードを取り出し、中に入る。

【KAMENRIDE J】

ディケイドから仮面ライダーJへと変身する。

「巨人には巨人だ」

【FORMRIDE J JUMBO】

仮面ライダーJ ジャンボフォームで闘うが巨人らはこちらに見向きをせず、街の破壊を止めようとはしない。

「やめろ！」

巨人の進行を必死で止めるディケイドJ。

「この世界にいつたい何が起きているんだ？」

そんなときであつた。いくつもの赤い光の玉が現われて巨人たちを攻撃していく。

フォームチェンジを解除し、ディケイドの姿に戻る。

「これは……いったい!？」

様子を伺っていると、もう一つの光の玉が土を掴み、光写真館まで運んでいった。

その光の玉はやがて人の姿を現していく。

「何者だ!？」

ライドブッカーをガンモードにし、銃の先を相手に向ける。

「ご安心を僕たちはあなたの味方です」

光から現れたのは細身の青年だった。

「お前。誰だ？」

「これは失礼。自己紹介がまだでしたね。僕は古泉と言います」

「お前、俺にいったい何のようだ？」

「そうですね……。あまり時間がないので結論から言います。

世界が再び1つになろうとしています」

「なんだと!？」

「ええ、この世界もいずれあの神人によって別の世界に組み込まれてしまいます」

神人に指をさす古泉。

「どういうことだ？　大ショッカーは消滅したはず。まさか、復活したのか？」

「いいえ。この世界の融合はとある少女によるものなのです」

「少女だと？」

「すみません。そろそろタイムリミットのようです。ディケイド、世界の命運はカードと共にあなたに託しました。今すぐあなたは旅へと出てください」

「待て！　いったいどういうことだ？」

古泉はディケイドの質問に答えないうまま光を発して消えてしまった。

ディケイドは変身を解き、元の姿に戻って、光写真館の中に入る。

「士くん。いったいなにがあったんだい？」

士は栄次郎を素通りし、送られてきたカードを手取る。

「これはあいつが送った物なのか？」

『全世界の命運はカード共にあなたに託しました——』

その言葉が士の頭の中で響いていた。

「士くん？」

栄次郎は心配そうに士の顔を覗き込む。

「爺さん。どうやら旅を再開することになった」

「えー！？ 急にどうしたんだい？」

「……詳しくは俺もわからないが世界の危機ってやつだ」

しかし、旅を再開するにしてもどの世界に行くのか見当もついていない。

士が真っ白なスクリーンに手が触れた瞬間、鎖が引かれて別のスクリーンが下りてくる。

「これは？」

近代的な都市に、その都市の中に白い修道服と学校の制服を着た二人の少女と真ん中に右手を天高く差し伸べる一人の少年の絵が眩く光る。

士は外へ出る。

「なんだ？ ここは？」

外は士の見たことのない光景が広がっていた。

序章（後書き）

初めまして。初投稿させていただきます聖依と言います。

この作品は原作を元に他のアニメとのクロスオーバーを想像して書いてみたかったです。

次はある魔術の禁書目録編です。

感想や指摘のほどお願いいたします。

第一話 「科学と魔術が交差する世界」

「なんだ？　ここは？」

外を覗くと近代的な景色を広がる。

街には円筒系のロボットが忙しなく回っている。

「これは？」

半そでのカッターシャツに黒のズボン。どこかの学校の制服のようだ。

他の世界に入ると土の服も変わってしまうのである。

土はカメラを片手に外へと繰り出し、写真を取りながら散策していくと。不良に絡まれている少女を発見する。

「今時中学生相手にかつあげとは」

と、言いながらカメラに収める。

「おい！　何を撮っていやがる」

どうやら一人の不良は土が撮影した瞬間を見たようで、少女を絡んでいた不良らは一斉に土の周りを囲んだ。

不良と言うのは以外と意思疎通ができていらしい。

「貴様！　こんな事をして。ただで済むと思っているのか？」

「まったく能のない猿は脅せば命乞いすると本気で思っているのか？」

「な、何だと！」

不良は土を殴ろうとしたが、逆に殴り返され地面に転がっていく。

「く、くそ！　一斉にかかれ！！！」

いくら不良がたくさん集まろうと土の敵ではなかった。

土にかかれればこの不良たちはその辺にある石ころ当然であった。瞬く間に不良たちは土に蹴散らされて、一目散に退却していく。

「まったく。どこ言ってもああ言うのは変わらないな」

と、土は散策を再開しようとする。

「アンタ！　ちょっと待ちなさいよ！」

さつきまで絡まれていた少女に呼び止められる。

「ん？ なんだ？」

「アンタ、どこかのヒーローになったつもり？」

「ああ？」

士は別に女の子を助けようとしたわけではなく、ただ、不良たちが勝手に絡んできただけであつた。

「なんだ？ 俺に何か用でもあるのか？」

と言いながら少女にカメラを向けて写真を撮る。

「アンタといい、アイツといい。アンタらの学校って善人気取りが多いわけ？」

いったい何の話かわからなかったが、士はちょうど街のことを知りたかつたため、この少女に聞くことにした。

「それより、ここはどこなんだ？」

「はあ？ アンタ何言ってるの？ 学園都市に決まってるじゃない？」

「学園都市……」

「それよりアンタこの辺じゃ見かけないけど、いったい誰なの？」

「人に名前を尋ねる前に自分から名乗るのが礼儀だろ」

「何よ……… ったく。御坂美琴よ。それでアンタは？」

「単なる通りすがりだ」

「アンタ、ふざけてる？」

美琴は右手をプルプルと奮わせる。

「冗談だ。門矢 士だ。美琴と言ったか。悪いがこの街について教えてくれ」

「アンタ本気で学園都市を知らないの？」

「ああ。初めて来たからな」

「うわっ、マジで何も知らずにここにいるんだ。まあ、いいわ。暇潰し程度に付き合っただけ」

どうやら学園都市という場所は超能力者を開発する場所であるらしいが、ここにいる全員が超能力者ってわけではなく、六割弱が『

『無能力^{レベル}』ばかり。

「なるほど。それでお前もその超能力者なのか？」

「そうよ。まさかここまで説明するなんて」

「お前たちの世界じゃ珍しくないのかもしれないが、俺の世界では超能力者なんて生き物はいないからな」

「ホント、随分と学園都市とは無縁のところに来たのね。あ……」

と、美琴が足を止める。

「ん、どうした？」

士は尋ねると、美琴はなぜか士の後ろに隠れる。

「そのままジツとしていなさい！」

美琴は士と同じ服を着た少年と白い修道服を着た少女から隠れるように士の周りを移動していった。

「お前、いったい何をしてるんだ？」

「うるさいッ！ アンタには関係ない——」

「お姉さま？」

と、言う声が聞こえ。美琴はおそろおそろ振り返ると、そこには美琴と同じ制服を着て、風紀委員の腕章を付けている少女がいた。

「く、黒子！？」

声が裏返る美琴。

「知り合いか？」

「え、ええ。同じ寮のルームメイトで」

「ま、まままままさかお姉さまが殿方とデートとは！？」

黒子という少女はムンクの叫びみたいな顔になる。

「ち、違っわよ！ ただ、私は学園都市について教えていただけよ
！」

「そんな……。わたくしと言うものがあるながら。お姉さまが浮気
なんて」

と、黒子の言葉に士は美琴を凝視する。

美琴は顔を赤らむ。

「アンタ……………そのふざけた煩惱打ち抜いてやろうか」

美琴はメダルを取り出す。

「じよ、冗談ですよ。お姉さま」

「ったく」

美琴はメダルをしまう。

「それにしてもお姉さまがあの方以外の殿方と話すとは珍しいですわね」

「だから、本当に街を案内してただけで――」

そのとき、美琴と士の背後で建物が爆発。

「なんだ？」

士は爆発音がした方向に振り返ると建物の中から黒煙が上がっていた。

「これは……テロ!？」

「そのようですわ。お姉さま。どうやらあの覆面グループが首謀者のようですわ」

爆破されたビルから覆面を被った人が3人出てきて、逃げ惑っている人間に危害を加えていた。

「ここは風紀委員^{ジャッジメント}たるわたくしにお任せを」

「ジャッジメント？」

「風紀委員と書いてジャッジメントって呼ぶの。風紀委員はこの街の学生警備員みたいなもの。たぶん、黒子なら大丈夫だと思っけど、私はここで少し様子を見てるから。アンタはどっかに避難してなさい」

と言われるが、せっかく超能力が見られるチャンスを生は易々と逃すはずがない。

士はカメラを片手に黒子の撮影を始めた。

「風紀委員^{ジャッジメント}ですわ!」

腕章を見せ、テログループの前に立ちあはる黒子。

「学園都市におけるテロ行為の疑いによりあなた方を……え?」
突然、黒子が間抜けな行為を出したと思ったら、突然テログループが緑色の怪物へと変化した。

「何。あれ？ どういった能力？」

「あれは、ワーム！？」

カブトの世界に現われた怪物。異種生命体ワーム。
なぜか怪物や怪人がいない学園都市にワームが出現した。

「どんな能力かわかりませんが、このわたくしの敵ではありませんわ」

黒子が投げた鉄矢がテレポートし、ワームに当たる。

「あれはテレポートか？」

「そうよ。黒子の能力は空間移動。^{テレポート}それにしても、あいつら全員能力者？」

「違う。あいつらは人間じゃない」

黒子の放った鉄矢はワームにあまり効いていそうになかった。

「いくら超能力者と言っても、ワーム相手じゃただの中学生か」

土は黒子とワームの間へと入り、ワームを蹴り飛ばす。

「おい、さつさと逃げろ」

「ふざけないでくださいまし。これは一般人に手が負えるものじゃありませんですの」

「悪いがこいつらの相手は俺だ」

ディケイドドライバーを付け、カードを取り出す。

「変身！」

【KAMENRIDE DECADE】

土はディケイドに変身する。

「アンタ。いったい何者？」

ディケイドに変身した土を見て啞然とする美琴。

「通りすがりの仮面ライダーだ。別に覚えておかなくていい」

ライドブッカーをソードモードにし、ワームを斬っていく。

「幼体ならこれで充分だ」

カードを取り出し、中へと入れる。

【ATTACKRIDE SLASH】

ディケイドスラッシュで三体のワームを一気に倒す。

「なんでこの世界にワームが？　ぐっ！」

終わったと思ったら複数の鉄矢がディケイドに直撃する。

「なんだ……？」

ディケイドは黒子を見る。

「体内に入れようとしたがどうやら無理みたいでしたわ」

「黒子！」

美琴は声を張り上げる。

「アンタ。いったいなにしてんの！？」

「お姉さま。あれはとんでもないお人ですわ。あなたが世界を破壊する悪魔ですの」

「世界を破壊する悪魔？」

「まさか、ここでもその呼び名を呼ばれるとは」

「ディケイド。風紀委員としてあなたを抹殺します」
ジャッジメント

「やれやれ。どうやら相手するしかなさそうだ」

「この学園都市を壊させませんわ」

両手に持っていた鉄矢がレポートし、ディケイドに直撃し、火花が散る。

「くっ！」

どこにしようが黒子の空間範囲にいる限り、黒子の攻撃が全方向から来る。

「どこだ？」

気づけば黒子の姿はなく。

後ろから黒子自身がレポートして、ディケイドにドロップキック。

ディケイドは地面に突っ伏す。

「くそ、調子に乗りやがって」

起き上がり、カブトのカードを取り出して、ディケイドドライブに入れる。

【KAMENRIDE KABUTO】

ディケイドカブトへと変身する。

「姿が変わった？」

カブトへの変身に驚く美琴。

「姿が変わりましても。わたくしからは逃げられませんか」

大量の鉄矢を取り出し、すべて空間移動テレポートさせていく。

「これ以上易々と当たるわけにはいかないんでね」

【ATTACK RIDE CLOCK UP】

ディケイドカブトの超スピードでテレポート攻撃を避けていく。

「消えましたの？ うっ……………」

黒子が周りを見渡していると首の後ろを叩かれ、ゆっくりと膝を付きながら地面に突っ伏していく。

「黒子！」

美琴は気絶した黒子に駆け寄る。

【CLOCK OVER】

カブトからディケイドへと戻る。

「アンタ、よくも黒子を！」

美琴の身体から電気が走る。

「安心しろ。気絶しているだけだ」

「アンタ、黒子の言ったとおりの奴なわけ？」

「だったらどうする？ お前も俺と闘うのか？」

「私は風紀委員でも警備員でもないけど」

美琴はメダルを取り出す。

「この街を壊そうとする奴は私が許さない」

ディケイドに向けて超電磁砲レールガンを放つ。

【FINAL ATTACK RIDE DIDIIDIEND】

美琴の超電磁砲が相殺される。

「嘘！？ ……今のなに？」

「これは……海東！？」

後ろを振り向くディケイド。

「やあ、士。久しぶりだ」

仮面ライダーディエンドの姿で現われる海東。

「まさか、士もここに来ていたなんてね」

「それはお互い様だ。それでお前はここで何をしているんだ？」

「もちろん。お宝頂こうとしている途中で、士と再会したってところだ。それにしても僕のファイナルアタックライドを相殺するなんて。さすがは常盤台の超電磁砲レールガンと言ったところか」

「こいつもアンタの仲間？」

「まあ。同じ旅をしてきた親友つてところさ」

「ディエンドはなれなれしくディケイドの肩に手を置くが、ディケイドはそれを払う。」

「見つけたぞ！　って御坂？」

「と、さつきすれ違った少年と白い修道服を着た少女がどうやらディエンドを追いかけてきたようであった。」

この二人は上条当麻とインデックス。

イマジンプレイカー

学園都市に住む“幻想殺し”と言う異能の力を持った普通の少年とイギリス清教に所属する一〇万三〇〇〇冊の禁書を記憶する魔術師の少女である。

もちろん士はこの事を一切知らない。

「貴様！　神裂の刀を返せ！」

当麻らは海東が盗んだ神裂火織の刀、七天七刀を取り戻すために海東を追いかけていた。

「海東……。また盗んだのか？」

「世界にあるお宝はすべて僕のためにある。後は一〇万三〇〇〇冊の子さえ手に入れば、この世界に用はない」

と、インデックスに指をさすディエンド。

「海東……。ついに人攫いも始めたのか？」

「士。君にはあの子の価値がわかっていないようだね。あの子の記憶している一〇万三〇〇〇冊の禁書はこの世界最大のお宝さ」

「だからと言って人攫いはまずいだろ」

「ディエンドはディケイドの話を無視し、勝手に事を進めていた、そんなわけで」

ディエンドはディケイドを前へ突き出す。

「土。僕のためにその少年くんを倒してくれ」

「おい！ 海東！！」

「あんだ。あいつの仲間なのか？」

「そうさ。僕たちは大親友さ。だから、土。頑張リたまえ」

ディケイドは即座に『違う！』と言おうとしたが、ディエンドの発言により状況を大きく望まない方向へと進められていった。

「なら、俺はお前をぶっ飛ばす！」

少年は右手に力を込め、ディケイドに殴りかかるが、ディケイドは少年のパンチを受け止める。

そこでディケイドは少し疑問に思った。

この少年は美琴みたいに何かの超能力があるのかと思っていたが、さっきのパンチといいどこからどう見ても普通の高校生でしかないけど、その疑問が晴れるのもほんのわずかであった。

「なっ！？」

勝手にディケイドの変身が解けてしまった。

「やはり。彼にとって仮面ライダーは幻想でしかないようだ」

ディエンドはカードを取り出す。

「少年くんと常盤台の超電磁砲が居たのではこちらに分が悪いようだ」

【ATTACK RIDE INVISIBLE】

「土。後は任せた」

「つて海東！！」

ディエンドはこの場から姿を消す。

ここに残ったのは変身を解かされた土と、この世界の住人の当麻とインデックスと美琴。

土は両手を挙げ、「……………降参だ」と呟いていると、燃えているビルの中からワームの生き残りが現われた。

「生き残るか」

当麻を突き飛ばし、土もその反動で避ける。

「逃げる！ そいつはワームと言う異種生命体だ」

「異種生命体って、インデックス！」

ワームがインデックスに襲い掛かるうとしていた。

「う……とうま！」

士は舌打ちをし、ワームを後ろから押さえる。

「何してる。早く逃げる！」

「あ……うん！」

インデックスは当麻のいる方向へと向かうのを見て士がもう一度変身しようとしたら。

「どけ！」

と声と共に轟音が響き、士は反射的に片手で顔を庇いながら屈む。

美琴の超電磁砲がワームを貫く。

「まさか。ワームを一撃で」

仮面ライダーでもない美琴がワームを一撃で倒す光景を見て、士は改めて美琴の実力を知った。

「おい。大丈夫か？」

と、インデックスに言葉をかける。

「うん。それよりさっきはありがとう」

「お礼ならあいつに言っておくれ」

士は美琴をさす。

「べ、別にアンタらのためにやったわけじゃないんだから。それよりアンタ、本当に何者なわけ？」

「まあ。強いて言うならその化け物の天敵だ。何でこの世界に現われたかは俺もわからないけどな。話ならうちへ来い。コーヒーとお菓子くらいなら出してやるよ」

士達とは別に彼らの様子を眺めていた奴がいた。

「ついに現われたな。ディケイド」

彼は鳴滝。ディケイドに対して激しく憎悪を抱き、敵視するもの。
「この世界の力で今度こそ貴様を消し去ってやる」

光写真館に戻ってから、気絶している黒子を近くのソファで寝かせた。

一通りの自己紹介は済ませた後、話は土自身について語った。

「つまり、なんだ。お前はことは違う異次元世界から来たってことではないのか？」

「そういうことだ」

「まあ、確かに説明は付くけど。でもね……」

この三人を他所にインデックスと栄次郎だけおやつに夢中であつた。

「とうま、とうま。このクッキーおいしいよ」

「いっぱいあるから食べてってね」

「おい。インデックス聞いているのか？」

「うんうん」 あと家に帰っても食べたいな」

「まったく……」

髪を掻き揚げる当麻。

「それであの泥棒もお前たちと一緒に別世界から来た人間ってことか？」

「一緒ではないがあいつも別世界から来た人間だ」

「じゃあ。あの泥棒が今、どこにいるか——」

「知らん」

当麻が言い切る前に即答で答える土。

「知っていたら今すぐ殴りにいつている」

「くそ。手がかりなしか」

手がかりがなく、半分諦め状態であつた当麻であつたが、土は当麻に助言をする。

「いや、そうでもないぞ。あの馬鹿はそいつを狙ってるんだ」

土はインデックスを指す。

「嫌でもあいつから会いに来るさ」

海東は自分の目がつけたお宝は絶対手に入れようとする奴である。
そう……………このように。

「やあ、士。無事だったんだね」

「やっぱ来たか…………」

「嘘…………ホントに来た」

士の言ったとおり。本当に海東が来たことにビックリする2人。

「僕のためにお宝を用意しておくなんて、さすがは士」

「悪いが俺はそこまでのお人好しじゃない。後はお前らの好きにや
つてくれ」

士は当麻に話を振らせた。

「おい！ 今すぐ神裂の刀を返せ！」

「ダメダメ。あれはすでに僕のお宝だ。あ、爺さん僕にもコーヒー
ね」

「ここは喫茶店じゃないんだよ」

そう言いながらも海東にコーヒーを差し出す栄次郎。

「それにしても士の写真も相変わらず成長しないね」

勝手に士の写真を見出す海東。

すべての写真がばやけたり歪んだりしているものだった。

「うわっ…………これでよくカメラマンやってるわ」

「どうやったらこんな風に撮れるんだ？」

当麻と美琴は士の写真を見ていく。

「どうやらこの世界も俺に撮られたがっていないようだ」

「いやいや…………ってそうじゃなくて」

誰もが士のカメラの腕のせいだと思っているが、当麻が話の話題
を元に戻そうとしたときだった。

「……………」

当麻の携帯が鳴る。

「くそ！」

携帯に出る当麻。

「士御門か？ いったい……………えっ、神裂が？ わかった今すぐ

そつちに」

と電話を切り、海東を睨む。

「おい！ 今すぐ刀を返せ！」

「駄目だ。お宝を簡単に渡すほど僕はお人好しじゃないんでね」

「こつちはお前のせいで大変なんだよ」

「だとしても僕には関わりのないことだ」

「そのふざけた幻想ぶち壊してやろうか」

当麻の右腕に力が入る。

一触即発の寸前だった。

海東も懐にあるディエンドドライバーに手をかけ、ここで二人の争いが起ころうとしていた。

「これじゃあ。話が進みそうにないわね」

「まったく。しょうもない奴らだ」

土は二人の間へと入る。

「なら海東。取引をするというのはどうだ？」

「取引？」

「こいつらがその刀に見合った宝を用意して交換する。それならどうだ？」

「え！？ 刀に見合ったお宝って」

「てか、こいつらって私も含まれてるわけ？」

「うん。それは悪くないね。でも、今のところ彼らが持っているお宝と言ったら。そこにいるインデックスちゃんしかいないよね。彼女を僕に渡してくれるなら喜んでこの刀を渡すよ」

「誰が渡すか！ いいか。必ず俺がそれに見合ったやつを持ってくるから絶対そこで待っている！！ 悪いが御坂。しばらくインデックスを頼む！」

「ってアンタ！ 待ちなさい！！」

当麻は一人先走っていった。

「まったく。アイツは……」

「さてと」

海東も立ち上がり。

「僕もこれで失礼するよ。そのお宝はしばらくここに預けておくからしっかり管理したまえ」

士に指をさし、海東もこの場を後にした。

当事者の2人は出て行って、残るは士と美琴、クッキーを貪っているインデックスとそのクッキーを作っている源次郎であった。

「まったく海東も相変わらずだ。おい、お前は吞気にクッキーを食べてていいのか？」

「ん？ もう……とうま、またひとりで突っ走って」

「追いかけていないのか？」

「これを食べ終えたら行くつもり」

絶対行くつもりないだろうと士は心の中で思う。

「そうだ。ひとつ不思議に思っているんだけど、なんであなたの名前がこの世界に存在^あるの？」

「……さあな。どの世界に行っても俺は有名人みたいだしな」

「ん？ えっと、どういうこと？」

話の輪の中で美琴だけがわかっていなかった。

「さつきつかさがここに来たのは初めてだって言っただけだね？」

「ああ、ここ来たのは今日が初めてだ」

「今日が初めてって、あれ？ じゃあ何でディケイドの情報があるの？」

「情報と言うよりも噂だね。身体的特徴とかの話がないし、漠然に世界を壊す悪魔としか話がないからね。その話は学園都市だけじゃなくてイギリスでも聞いたよ」

「じゃあ。その噂を知らなかったのは私だけ？」

「いえ、そういうわけじゃありませんわ」

第三者の声が聞こえ、振り向いてみると先ほどまで気絶していた黒子が目覚めたようだ。

「黒子！ アンタ起きてて大丈夫なわけ？」

「気絶してただけですの。でも、気分はあまりよろしくなくて」

「なら、コーヒーより紅茶持って来よう」

栄次郎は台所へと行く。

「それより話の続きですわ。ディケイドの情報は風紀委員ジャッジメントに届いた謎のメールですの」

「メール？」

「ええ、内容は『世界を壊す悪魔が直に現れるだろう』という短い分とディケイドの画像だけでしたわ。後はネットでの都市伝説の一部の話とかで、当初はそういったマニアのいたずらかと思いましたが特にお姉さまに話はしていなかったですの」

「だけど、俺を見た瞬間、いたずらが確信に変わったわけか？」

「ええ、その通りですわ。まさか、あの悪魔が本当にいたとは思いませんでしたわ」

「それで黒子。メールの発信元は？」

「一度、初春に探らせましたが残念ながら特定することはできませんでしたわ」

「なるほど。うん。そのメールを送った人って少なくともディケイドを知っている人物。たぶん、その人もつかさと同じ別世界の人間じゃないかな？」

「まあ、そんなところだろ」

士は思い当たる節があった。

おそらく噂を広めているのは鳴滝の仕業であろう。

ライダーの世界でもそうだったが、彼はディケイドの噂をライダーたちに広めていたほか、ショッカーに身売ってでもディケイドを敵視していたことからほぼ間違いないだろうと確信する。

「まったく。アンタも変な奴に恨まれたものね」

「まあ、こういうのは何回もあるから慣れた」

今度は黒子の携帯が鳴る。

「ちよつと失礼します」

黒子は席を外して、携帯に出る。

「どうしましたの？ 初春。……………怪物が街で暴れてる？」

すると土と美琴の視線が黒子のほうへと集中する。

「わかりましたわ。詳細はメールで、わたくしもすぐに駆けつけますわ」

黒子は電話を切る。

「黒子。怪物が暴れているっていったい？」

「おそらく先ほどと同じ怪物が街で暴れているのでしよう。先ほど初春から現場の状況を聞いたのですが、どうも警備員アンチスキルじゃ手に負えていないようで。今、怪物の画像が送られたみたいですわ」

士たちはその画像を見る。

（こいつらはグロンギにオルフェノク）

今度はクウガとファイズの世界に出てきた怪人であった。

「いやー、すまないね。ちょうど葉っぱを切らしていたみたいでね。緑茶になるけど良かったかい？」

栄次郎は台所からお茶を持ってきて黒子に差し出す。

「すみません。少し用が出来たので」

黒子は立ち上がるうたとすると身体がふら付いて倒れそうになる。

「馬鹿。無茶してんじゃないよ」

美琴に支えられる黒子。

「しかし。わたくしが行かなければ街が大変なことに」

「だからって。そんな身体で行っても足手まといになるだけよ」

美琴は黒子が無理やりソファアーのところまで連れて行こうとする。そんな光景を見ていた土は席を立つ。

「……………爺さん。ちよつと出かけてくるぜ」

「土くん。どこに行くんだい？」

「紅茶切らしてんだろ？ 買いに行つてやるよ」

と栄次郎に伝え、土は外に出て、バイクに腰を掛けようとする。アンタ。あの化け物のところに行く気ね」

土が振り向くと美琴がいた。

「アンタはアイツとどこか似てるからね。行くんだったら道案内は必要でしょ」

士は微笑し、予備のヘルメットを美琴に渡す。

「乗れよ」

「そう来なくちゃ」

二人はグロンギとオルフェノクが暴れているところへ。

士達が向かっている場所には上条当麻を含む3人がグロンギとオルフェノクを対峙していた。

「くつ。何なんだ？ この生物は」

漆黒の修道服に赤い髪の彼はステイルⅡマグヌス。

イギリス清教の所属で必要悪の教会の魔術師である。ネセザリウス

「たぶん。あいつが言っていたあの化け物の類だと思うけど」

「警備員は撤退。アンチスキルしかもカミヤんの幻想殺しは効かなくなっちゃ。イマジネレイカー

ステイル。あんたが頑張らんとあかんみたいや」

彼は上条当麻のクラスメイトで土御門元春。学園都市や教会、色んな勢力ともつながりを持つ多角スパイでもある。

「まったく。神裂はどうしてる？」

「安心するにや。無事に天草式の連中と合流ができたみたいや」

「そうか。なら、彼女の分まで遠慮なくやらせてもらう。イノケンテ魔女狩りの王」

ステイルの出した炎の巨神は瞬く間にオルフェノクとグロンギを包み込んでいく。

「よし！」

ガッツポーズする当麻。

「いや、まだだ！」

炎の中からオルフェノク2体姿を現す。イノケンテ

「魔女狩りの王でも倒しきれないとは」

「カミヤん。ステイル来るぞ」

三人が身構えていると。

【FINAL ATTACK RIDE FAFFAFAIZ】

ディケイドファイズのクリムゾンスマッシュでオルフェノクを一体、
「いっけええええっ！」

もう一体は美琴の超電磁砲がオルフェノクを頭上から貫く。
宙から落下している美琴をオートバジンがキャッチする。

ディケイドの姿に戻り、オートバジンは地面に着くと同時にバイクへと戻り、美琴はバイクに跨っている状態である。

「御坂!？」

「何だ。アンタもここにいたんだ。相変わらず厄介ごとに手を出すのね」

「てか、何でお前らがここにいるんだよ!？」

「細かいことは気にするな。それよりあれだけか？ グロンギとかいた気がするんだが」

「大方はこちらで片付けたんだが……………つていねえ!？」

当麻が気付いた頃には土御門とステイルの姿はなく、二人は建物の上から見下ろしていた。

「あれはディケイドや」

ネセサリウス

「必要悪の教会でもかなりの危険人物とされている。どうする。ここで殺るか？」

「やめておいたほうがいい。どういわけか常盤台の超電磁砲もいる。ここで暴れると正体がばれるにや」

土御門は身を翻す。

「仕方ないここは撤退……………ん？」

「どうしたんや、ステイル？」

土御門はステイルが見ている先を見た。

「なんだ、あれは？」

当麻が何かがこちらへ向かってくるのに気づき、士と美琴も当麻の向いている視線に目を向けた。

見た目はかつて戦ったシャドームーンに似ていたが、あのライドーはディケイドも見たことなかった。

すると三人に向けて手を前に出すと、手から電気が流れだした。

轟！ 音を立てて波動が三人を襲う。

「くっ！ うおおおおおお！！」

当麻の幻想殺しにより、打ち消される。

「嘘。……………今の超電磁砲！？」

「おい！ 超電磁砲はお前だけだろ！」

「でも、アイツは間違いなく超電磁砲を撃った。私たちに向けてね」
美琴はメダルを取り出して身構えるが、底知れぬ恐怖が肩を震わせる。

そんな美琴の肩にディケイドはそつと肩を置いて当麻の前に出る。

「お前。何者だ？」

「貴様がディケイドか」

「聞いているのは俺のほうだ」

「ふっ。いいだろ。我はジユダ。学園都市最強の者」

「最強だと？ ふざけるのもいい加減にしたらどうだ」

「ふざけているのは君だ。ディケイド」

一瞬にしてジユダはディケイドの後ろへと立つ。

「今の……………空間移動！？」
テレポート

「消える」

ディケイドは一瞬にして吹き飛んだ。

「士ー！！」

「嘘……………今度は空力使い！？」
エアロハンド

美琴が今まで見た中でもすさまじい力であった。建物の1つや2つ軽く貫通していた。

「どういうことだ。空間移動（テレポート）に空力使い（エアロハンド）って人間が使える能力は1つだけだろ？」

「まさか……。多重能力者（デュアルスキル）！？」

「さすがは幻想御手事件（レベルアップ）の関係者とあって気付くのが早い。だけど、君たち2人はここで消えてもらっ」

美琴と当麻に向けて超電磁砲を放とうとするが。

「消えるのはお前のほうだ」

声がすると同時に、車の窓ガラスからディケイド龍騎が飛び出して、ジユダを殴り飛ばした。

「まさか。あの衝撃から逃れただと？」

「あの衝撃に当たる寸前に俺は龍騎の力でミラーワールドの中に入っ
て難を逃させてもらった。こんな風にな！」

フロントガラスに入り、また別の窓ガラスから姿を現してジユダ
を殴り飛ばす。

さらに追い討ちをかけるようにカードを取り出す

【ATTACK RIDE STRIKE VENT】

ジユダに向けてドラグクロー・ファイヤーを放つ。

「うお！」

ディケイド龍騎を睨みつけるジユダ。

「あの程度で俺は倒せないぜ。はあ！」

もう1度ドラグクロー・ファイヤーを放つ。

「クソが。そんなちなけな炎、消してやる」

窒素を槍状に固形化して、ディケイドに向けて投げる。

炎は消され、ディケイドを掠める。

さらにアルミ缶を数個投げるジユダ。

「アルミ缶？ ……まさか！？ それに触れちゃ駄目！」

美琴の声がディケイド龍騎の腕を動かし、アルミ缶に向けて炎を
放つ。

すると、そのアルミ缶が炎に触れると同時に爆発した。

「ボンバーランス シンクロトロン窒素爆槍に量子変速。アイツどれだけの力を所有してるわけ」

「なるほど、一筋縄でいかないのは良くわかった。なら、このカー
ドで決めてやる」

【KAMENRIDE KABUTO】

龍騎からカブトへ変身する。

【ATTACKRIDE CLOCK UP】

高速移動してディケイドカブトはソードでジユダを斬っていくがジユダの装甲がものすごく硬くなっていた。

「なるほど、目に見えないほどの速さで走っているわけか。なら…

………」

するとジユダもディケイドカブトに追いつくスピードを出す。

「クロックアップのスピードに追いつくだ？」

「これで終わりがディケイド」

お互い攻防し合いながら話す。

「そうかな？」

ソードモードからガンモードへと変え、ジユダにゼロ距離で打ち、ジユダは撃たれた反動で後ろへと下がったと同時にディケイドカブトが蹴り飛ばす。

士は後ろを向きカードを入れる。

【FINALATTACKRIDE KAKAKAKABUTO】

ディケイドカブトに突進していくジユダ。

「はあ！」

ジユダにライダーキックが炸裂したと思った。

だが、突進してきたジユダは残像であった。

「なに！？」

「こつちだ」

ディケイドカブトが振り向く頃には波動砲のようなもので撃たれた後であった。

「うわあ！」

ディケイドカブトの変身が解け、転がりながらディケイドの姿に戻る。

「………いったい何が？」

高速移動の間。当麻と美琴は何かあったかわからないが、唯一わ

かったのはディケイドがジユダにやられたことであつた。

「くっ！」

カードを取り出し、ディケイドドライバーに入れる。

【FINAL ATTACK RIDE DEDEDEDECADE】

「はっ！」

ディメイションキックを放つがジユダが何かを呟いている瞬間。

ディメンションキックがかき消されてしまった。

「なに！？」

一瞬、何が起きたのかわからなかったが、ディケイドはそのまま落下していき、ジユダに首を掴まれただけで、ディケイドの身体に火花が飛び散った。

「土！」

変身が解けて膝から崩れていく土。

ジユダの魔の手が迫ろうとしていた。

第一話 「科学と魔術が交差する世界」(後書き)

仮面ライダーディケイド とある魔術の禁書目録編スタートです。

ジユダに敗れたディケイドですが、ジユダは何者？ 土の安否はいつたい？ この窮地を当麻や美琴はどう乗り越えるのか見ていきましょう。

では次のお話でお会いいたしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3726y/>

仮面ライダーディケイド Depression of God

2011年11月15日03時28分発行